

## 〔好古日録未〕雜器

世ニ婦女ノ普ク用ル筭ハ、貞享年間御厨子所預故備前守始テ工人ニ造ラシム、後ワヅカニ十數年ニシテ宇内ニ弘マリタリ、

## 〔歷世女裝考二〕釵子に耳搔を作り添し肇

筭に耳かきのあるは、前にまゐるしたる如くいと古し、かんざしの耳搔は近し、○中おのれ百樹文化十三年上京の時、加茂の季鷹大人にまばく對話しつるに、ある時話右の事におよびけるに、大人謂やう、閑窓自語にか、れたる如く、かんざしへみ、かきを付たるは、宗直ぬしの創意なり、然るに其頃北野に開帳ありしに、さかしき商人、宗直の創意を襲ひ、梅ばちの紋に、み、かきある銀ながしのかんざしを、北野の社内にて賣けるに、人々もてはやしたるより、み、かきある簪世にはやり、今はかんざしといへば、耳搔ある物になれり、今げいこどもがさす、べつかふのかんざし、もし唐人がみば、日本の女は耳の穴ひろしとおもふべしと、大笑ひしたる事ありき、件の説どもに據ば、簪に耳搔ありし肇は、享保三四年の事なるべし、

〔守貞漫稿女扮十一〕撥耳琴柱形略○圖

此肩ノ二段ニナリタル、三都トモニコトジト云、江戸モ先年ハ有之、今ハ廢シテ稀也、

〔守貞漫稿女扮十二〕今世江戸ノ筭簪圖略○圖ノ如ク短キヲ流布ス、然ト雖ドモ畫圖ヲ見ルニ、甚ダ長ク

畫ケル物多シ、故ニ先日始テ江戸ニ來ル大坂ノ女客アリ、其簪太ダ長シ、其故ヲ問ヘバ、江戸ニテ短キ物ヲ用ヒズ、必ラズ簪ハ長ヲ流行ト察テ特製之所也ト、余再問、何ニ據テ察テ長キヲ流布トスト云バ、江戸一枚摺ト云錦繪ヲ見ニ、筭簪太ダ長シ、故ニ江戸風ヲ倣テ如此ト、今當所ニ來テ畫圖ノ非ナルヲ知ト云リ、今世ノ人スラ東西此誤アリ、況ヤ後世ノ人、今ノ畫ヲ見テ證トスルコト用捨アルベシ、